

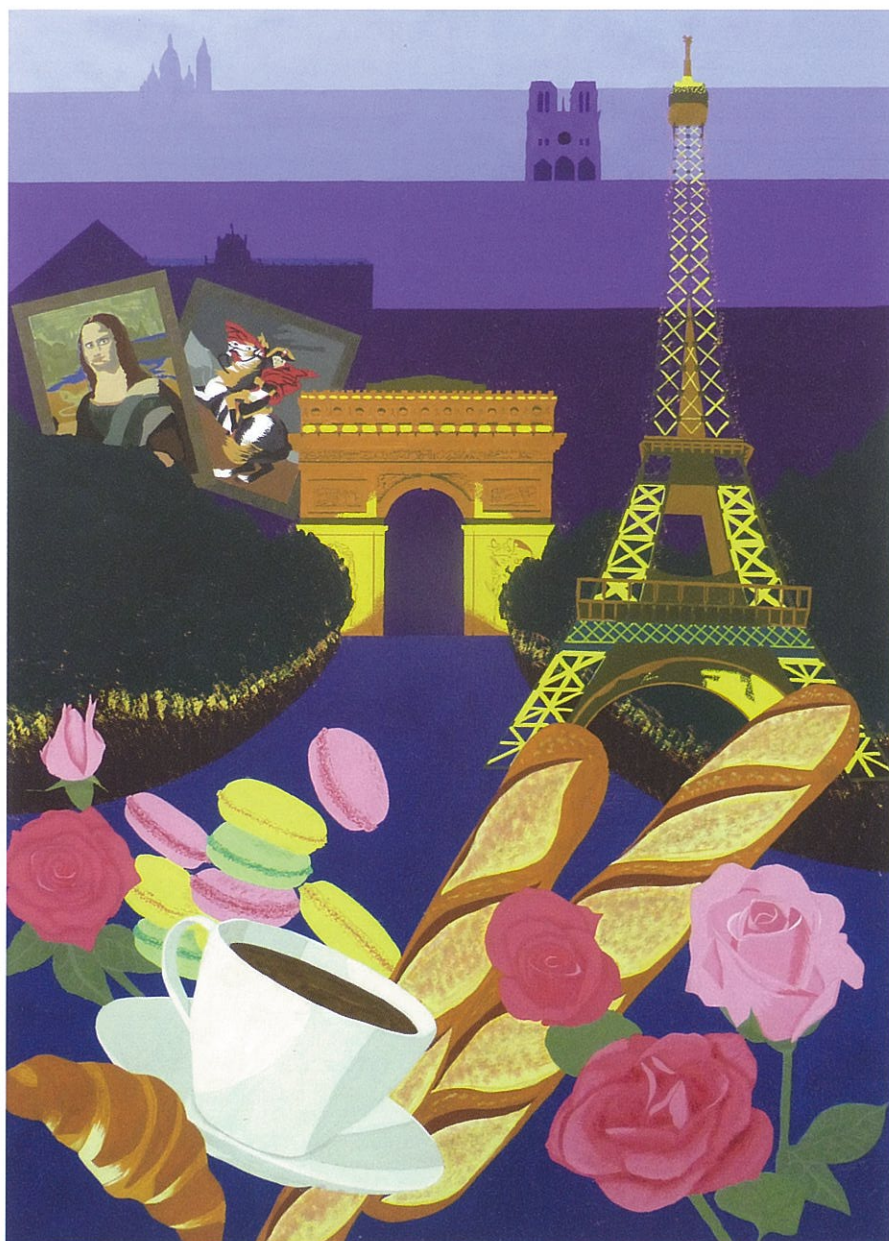
ポローニア

paulownia

vol. **30**

目次

- 2** 教育局次長挨拶
ポローニア巻頭言
◆甲斐雄一郎
筑波大学「山海嘉之教授、中高生と大いに語る」
◆新津勝二／濱本悟志
- 3** 「ヤングアメリカンズ筑波大学附属学校スペシャル」を開催
～ヤングアメリカンズと筑波大学附属学校の150名の子どもたちがつくる歌とダンスのステージ!～
◆新津勝二
- 4** 雪と過ごし、雪と戯れる!【雪の生活】
◆加藤宣行
附属大塚伝統のスキー合宿
～体育専門学群学生の参加～
◆中村 晋
寒さを吹き飛ばす小学部の冬季教室
◆山田 毅
- 5** 8回目となったHWA CHONG校との相互短期留学
◆鎌倉芳信／関野智史
- 6** 働く人になろう!
◆柘植美文
パラリンピック競技支援シンポジウムを開催
—筑波大学医療科教員養成施設—
◆宮本俊和
- 7** 平成25年度筑波大学附属学校教育局主催公開教員研修会等開催
◆附属学校教育局学校支援課
勇気と自信をいただいた発表会
◆榎並裕子
平成26年度 附属学校研究発表会日程表
- 8** 「科学の芽」賞募集要項



絵:「Paris」上原 悠(附属聴覚特別支援学校 高等部専攻科 造形芸術科 デザインコース2年)





YUICHIRO
KAI

優劣のかなたに連れ去る力 附属学校を横断した二つの催しを経験して

附属学校教育局 次長 甲斐雄一郎

昨年度は筑波大学開学40+101周年にあたり、全学で数多くの記念事業が催されたのは周知のとおりです。附属学校でも「山海嘉之教授、中高生と大いに語る」(1月、附属中学校育鳳館)と「ヤングアメリカンズ筑波大学附属学校スペシャル」(3月、附属小学校講堂)を関連行事として実施しました。いずれも校種をこえた児童・生徒が一堂に会し、相互に感謝と敬意を持つ得難い機会となりました。参加者からの「附属の生徒でよかった」という感想や、教員からの「子どもがつながることによって教師もつながることができた」という評価を聞くことができたのは、これらの催しによってもたらされた思いがけない喜びです。

山海先生はロボットスーツHALの開発者として世界的に著名な方です。その先生が約200名の中・高生を対象にご自身の研究を語り、フロアからの闊達な質問や感想に答える、というのが前者のプログラム、後者は約150名の児童・生徒が、英語文化圏の出身者を中心とする数十名のキャストによるワークショップを経て、歌や踊りを披露する公演でした。いうまでもないことながら参加者個々の質問や感想、また歌や演技におけるレベルの差は厳然としてありました。したがって同じ会場に集まり、同じ活動を経験するだけでは相互の感謝と敬意の醸成を期待することなどできなかったはずです。それにもかかわらずフロア全体を巻き込み、一気に優劣のかなたに連れていったあの時の力、それはいったい何だったのでしょうか。折にふれて考えているところです。

筑波大学「山海嘉之教授、 中高生と大いに語る」

附属学校教育局 次長 新津勝二
附属駒場高等学校 副校長 濱本悟志

1月11日、附属中高8校
(普通附属5校と視覚・聴覚・
桐が丘特別支援学校) 約200名の
中高生が附属中学校育鳳館に集い、

筑波大学開学40+101周年記念事業の一環として、ロボット
スーツHALの研究で世界的に注目されている山海嘉之先生
の講演会が開催されました。

ロボットスーツHALは、体に装着することによって身体機能
を改善・補助・拡張することができる世界初のサイボーグ型
ロボットで、身体機能に障がいのある方への自立動作支援や
介護支援、工場などでの重作業支援、災害現場でのレスキュー
活動支援など、実に幅広い分野で活用が期待されています。

山海先生は、子どもの頃の夢や生活、研究者としての出発
と発展、HALの研究の様子や未来について話され、研究開
発には情報、機械、医療、福祉、倫理など様々な分野が関係
し、「社会に出たら理系文系など関係ない。自分の興味を軸
に幅広く勉強することが大切。」と生徒たちにやさしく語り
かけてくださいました。

その後の質疑応答・討論では、生徒たちから「今後、
HALに加えたい機能は何ですか?」「人だけではなく、

動物を対象としたロボットスーツの応用も考えていますか?」

「HALのデザインを変更する予定はありますか?」等々予定
時間を超える積極的な質問が数多く出されました。山海先生
は、ひとつひとつの質問に対し、最先端の研究も含めて分か
りやすく説明され、最後に「人や社会に役立つ」「未来を作るの
はあなたたちだ」という貴重なメッセージをいただきました。

今回の記念事業は、生徒たちにとって「発想するところ」
「科学と福祉」「人間と地球の未来」について考える貴重な
機会になりました。その後、生徒たちからは、「研究者として
も超一流だけど、人柄にすごく惹かれる」「今度、大学の研修
室にいて、HALを実際に見てみたいし、装着もしてみたい」
「こんないい機会だから、他の生徒にも出席してもらいた
い、僕たちだけで聴くのはもったいない」「未来開拓を皆さ
んに託すって言われたけど、そこに自分も入っているってすご
いことだね」などの声が寄せられました。生徒たちにとつ
ても教職員にとつても、実に感動的な講演会でした。

ロボットスーツHAL



「ヤングアメリカンズ筑波大学附属学校スペシャル」を開催

～ヤングアメリカンズと筑波大学附属学校の
150名の子どもたちがつくる歌とダンスのステージ!～

附属学校教育局 次長 新津勝二



去る3月7日～9日に筑波大学附属小学校において「ヤングアメリカンズ筑波大学附属学校スペシャル」が開催されました。

「ヤングアメリカンズ」は、音楽を通して若者のありのままの姿を世に伝えようとアメリカで設立された団体で、日本でも2006年から児童生徒等を対象に、歌と踊りのワークショップ・ショーを展開しています。世界各国から選抜された若者(キャスト) 40数名から歌と踊りのレッスンを受け、チームワークやチャレンジすることの大切さを学ぶ一連の活動は、参加者のみならず観覧者にも夢と希望を与え続けており、2011年からは東北支援プロジェクトとして、被災地の子どもたちを対象にした支援活動も行っています。

今回は、筑波大学40+101周年記念事業として行われ、附属11校の児童生徒と教員総勢147名が参加し、最終日に約700名の観客の前で見事なステージを披露しました。筑波大学附属学校の長い歴史の中でも11校の子どもたちが一堂に会して活動するのは初めての試みで、小学生や障害種別の特別支援学校の子どもたちを中高生がリードしサポートする場面があちこちで見られました。また、車いすの使い方を教えたり、手話を習ったり、お菓子を分けあったりしてその場で仲良くなる子どもたちも多く、期待以上の成果を上げた3日間になりました。ショーの最後には、石隈利紀筑波大学副学長が挨拶をし、その後、上野通子文部科学大臣政務官から、わずか

3日間で20曲以上の歌やダンスを習得し笑顔とパワーあふれるステージを披露した子どもたちに励ましと感謝の言葉が送られました。



参加した児童・生徒の感想

●はじめはダンスがむずかしかったけれど、ヤングアメリカンズの人たちに教えてもらい、だんだんできるようになりました。アニーの歌を英語で練習して本番で歌えたことがうれしかったです。それから、車いすの友だちができました。タイヤを触って車いすだとわかりました。『車いすでも一人で動けるんだよ』と聞いてすごいと思い、色々な人がいるんだとわかりました。とても楽しい3日間でした。もっと歌や英語を頑張って、また参加したいです。

●外国の人に話しかけられて、私はちょっとドキドキしました。でも、英語がちょっと話せるようになりました。この3日間の中で一番心に残ったことは、歌ったりダンスをしたことです。理由は、みんなで楽しく練習できたからです。もっと英語を勉強して、外国の人と話せるようになりたいです。

●最初は緊張してしまいました。はじめてワークショップに参加したのでどうしたらいいのかよくわからなかったからです。でも、『ここは楽しむ場所なんだ』ということがわかったときから自然と緊張はなくなりました。そして、おもいっきり楽しめました。



保護者の感想

●筑波大附属学校のコラボで、お兄さんやお姉さんたちや障害をもったお友達とひとつのステージを作り上げました。この感動体験を通して、言葉や文化の壁だけでなく、幅広い人たちとの可能性とやっていく自信を持ったことに喜びを感じています。

●夢のような三日間の体験でした。チアダンスを習っている娘にとって、ダンスレッスンやステージを最高に楽しんだのはもちろん、英語が話せるようになりたいと新しい夢ができたり、初めて耳の聞こえないお友達を作って参りました。豊かな体験を沢山させて頂けたことに、心から感謝しております。

●二日間の練習はクタクタで、息子が外国人の方々と何かを作り上げるという活動は初めての体験でした。『外国の人達も特に日本人と変わらないんだね』心の在りように違いなどではなく、おらかな優しさに触れさせて頂き、未知なる新しい場所も、息子にとって居心地のよい場所へと変えて頂けたのか…と感謝の思いです。

●鳥肌が立つようなすばらしいショーでした。娘は体がかなり不自由なため思うようにいかないこともありましたが、高校生の皆さんに休憩の時などに話しかけてもらったり、帰り際に『また会おうね』などと声をかけてもらいました。他校の生徒の皆さんと接することができ、とてもよかった3日間だったと思いました。

●初日に迎えに行った際に、我が子がアメリカンズのお兄さんとハイタッチをしている姿を見て、大変感動致しました。踊りや歌が好きな息子の個性を存分に引き出して下さり、毎日帰宅すると目を輝かせて話をしてくれました。きっと夢の中の世界にいるような気持ちだったのでしょうか。アメリカンズの皆様から受けたグローバル感はもちろんのこと、障害を持った子ども達との時間もとても心に残ったようで、この経験は息子にとって、新しい自分の発見にも繋がり、年齢を超えて、国を超えて物事を考えていく力になったと思います。



雪と過ごし、雪と戯れる!【雪の生活】

附属小学校では、毎年1月に、5年生全員で3泊4日の『雪の生活』に出かけます。25年度は、平成26年の1月21日～24日までの4日間でした。メインはスキートの練習ですが、『スキー合宿』とは呼ばないところがミソです。

行き先は、奥志賀の横手山ゲレンデ。映画の舞台にもなったところで、標高が高く、雪質は最高、晴れた日の頂上からの眺めも他には代え難いものです。そのかわり、天候が荒れやすく、寒い! 自然の厳しさをいやと言うほど味わせてくれる環境です。そのような、冬の厳しさも含めた雪国の生活を、時には歯を食いしば

りながら、時には仲間と励まし合い、喜びを共有しながら過ごす。そんな3泊4日です。

参加した子どもたちは、あっという間にスキー場での生活に慣れ、みるみるうちに上達していきます。それはただ単に練習を繰り返すだけではなく、友と過ごす濃い4日間という特有の環境だからこそなしえることだと思います。『雪の生活』で得られることは、スキー技術の上達だけではないことがおわかりいただけたでしょうか。

附属小学校 教諭
加藤 宣行

附属大塚伝統のスキー合宿～体育専門学群学生の参加～

附属大塚特別支援学校中学部と高等部では、昭和53年から毎年1月にスキー合宿を実施しています。この行事は今年で35回目になる附属大塚の伝統行事です。様々な生活経験を通して社会に参加するために必要な力を身につけることを目指す本校では、雪国での厳しい自然に触れることも貴重な体験と考えています。また、スキーが生涯スポーツとして位置づき、将来の社会参加につながることも障害のある子ども達にとって大切にしたい私たちの願いです。

一方で、このスキー合宿は体育専門学群専門科目の「特殊体育授業理論・実習」の授業として毎年多くの学生が参加しています。昨年度も学生達に支えられながら大勢の子ども達がスキーの練習を行いました。

スキー合宿では、生徒の滑走レベルに応じてグループ指導をしています。昨年度は、雪上でのレクリエーション、スキーブーツでの歩行や板を付けて歩く練習を行う初級グループ、開閉器を使った制動の練習からリフトに乗って緩斜面の滑走を練習する中級グループ、斜面の状況に応じてブルークボーゲンで滑走する練習を行う上級グループを展開しました。

学生は、主に中級から上級コースの指導にあたりました。中級グ

ループでは、思うようにブルークの姿勢をつくれな生徒達が勢い余ってコースをはみ出してしまうことがあります。そんな時、体で受け止めるのも学生達の役割です。中には喜んで学生に胸に飛び込む女子生徒がいたとかいないとか…。しっかり制動ができるようになった生徒達は、リフトに乗ってコースに出て行きます。そんな時に頼りになるのもスムーズな乗り降りを補助してくれる学生達です。緩斜面の滑走では、一人での制動に不安がある生徒とハーネスを結んで一緒に滑走したり、ブルークボーゲンの姿勢や体重移動のモデルを示したりしてくれました。やさしい学生に支えられながら伸び伸びと練習する生徒の姿がとても印象的です。

スキー合宿における学生の役割はスキーの指導補助だけではなく、食事や入浴、荷物整理などの様々な生活介助も行っています。大塚の生徒達にとって、学生と共に過ごす3日間は、彼らの生活経験を広げ、主体的に活動に参加する態度を育むよい機会となっています。また、学生達にとっても、障害のある子どもと深く関わるこのような経験の場は、将来指導者となった時に役立つものと思われます。

附属大塚特別支援学校 中学部主事
中村 晋

寒さを吹き飛ばす小学部の冬季教室

附属視覚特別支援学校 教諭 山田 毅

冬季教室は、毎年2月上旬に5年生と6年生が参加して行われます。この行事は、視覚に障害のある児童にも冬の代表的なスポーツであるスキーを体験させたいという思いから、昭和50年代に当時の教員が様々な困難を克服して始めました。その頃は、まだ新幹線が完成しておらず、赤羽から石打まで4時間という長い時間をかけて急行列車で移動しました。現在は、上越新幹線で移動するため、あっという間にゲレンデに到着します。移動手段の変化は時代の流れを感じますが、子ども達へ雪国の生活やスキーの楽しさを伝えたいという当時の教員の思いは、今も脈々と受け継がれています。

さて、いよいよゲレンデでの活動の始まりです。初日は雪の降る中でしたが、雪に慣れるためにソリで遊んだり、傾斜の緩いゲレンデでスキーに挑みました。雪は冷たいのですがふわふわしているので、ソリがひっくりかえってもヘッチャラです。後半は、ソリをしていた子どもは交代してスキーです。固いスキー靴をぎこちない動きで板にセットします。片足で立つときにバランスがとれず転んでしましますが、雪の上なので痛くありません。何とか靴を板に付けていよいよ滑走です。インストラクターが子ども達をよく理解し、優しく丁寧に教えてくれるので怖さも

すぐに消えていきます。最初は手を引いてもらうのですが、励まされながら進みゆつくりと手が離れて一人で滑った瞬間「できた!」という声がゲレンデに響き渡ります。満足感と成就感で満面の笑みを浮かべます。子どもの力に合わせ楽しみながら行う活動の成果が表れる瞬間です。2日目は、滑る長さも少しずつ長くなりいよいよリフトに乗車です。最初に乗るときは「大丈夫かな…」と不安げな表情ですが、徐々に一人で乗ることができるようになりました。色々なゲレンデに分かれ、持っている力に合わせて全ての児童がスキーを楽しみました。スキーの技術を身につけ、目標を達成した感動を味わい自信を付けることもできました。

この行事は、支援してくださっている現地スタッフが、毎年同じ方であることも行事を成功させている大きな要因といえるでしょう。子どもたちの感想文には、毎年この行事がとても楽しく満足できたという様子を伺い知ることのできる内容が湧き出ており、とても良い意義のある体験的な行事になっています。



8回目となった HWA CHONG校との相互短期留学

シンガポールのHWA CHONG JUNIOR COLLEGEとの相互短期留学は、2006年に始まりました。第一回AYLS(現在APYLS)の事前折衝でHWA CHONGを訪れた際、当時のアン校長との話の中で、AYLSとはまた別の形での相互交流をしませんかという話が持ち上がり、その年の11月、HWA CHONGから4人の生徒が附属高校に留学したのが最初でした。その後、双方とも附属中学を有していることから、附属中学校をも加えての交流にしませんかと附属高校側から提案し、2回ほどHWA CHONGの中学から筑波の附属中学にも受入れました。しかし、現在は、HWA CHONG JUNIOR COLLEGEとの相互短期留学となっています。

第8回となる2013年度は、11月29日から12月9日までの期間、HWA CHONGから7人の生徒(男子1名、女子6名)が来校しました。それぞれバディーとなる生徒の家にホームステイし、附属高校の通常授業を受けたほか、所属のクラスでの交流、附属中学生との英語でのトーキング、卒業生による都内研修などを体験しました。シンガポールは、一年を通して暑いことから、制服は男子は半袖にズボン、女子は半袖にスカートという服装ですが、附属高校では、全員おもに公式行事の時にのみ着る茶のブレザーという服装で過ごしました。1限から6限まで、びっしりと詰まった日本の時間割式授業にはやや疲れを感じたようでもありました。

一方、筑波側からは、3月28日から4月6日までの期間、10名の生徒(男子2名、女子8名、うち女子3名は附属中学校から)がHWA CHONGに短期留学しました。HWA CHONGは、広大な敷地に充実した施設があり、講堂や理科系の実験室などの設備はもちろん、陸上の400mトラックや大きな

制服を借りHWA CHONGの一員となった筑波生徒(前列真ん中)



プールなどのスポーツ施設も整備され、素晴らしい教育環境の学校です。

HWA CHONGでは、7時45分から朝礼があり、国旗と校旗の掲揚とともに、生徒全員による校訓の唱和があります。そして、いわゆるホームルーム教室がなく、クラスごとにベンチが設定されており、クラスメイトはそこで集うことになります。

附属中・高からの生徒たちは、授業のほか、部活動や放課後、バディーと各地を訪問するなどの体験をしました。日本と違って、それぞれ選択した授業ごとに教室を移動するスタイルや、学校のキャンティーンで中国料理、インド料理、マレー料理、日本料理などいくつもあるブースから自由に選び購入して昼食をとる生活に、まるで大学にいるような新鮮な驚きを持ちました。

早口の英語で授業が進められるため、内容の深い理解までは及ばせんでしたが、HWA CHONGの生徒の授業への集中力、沢山の宿題を日々こなす姿勢に刺激を受けていました。

帰国の前夜は、一人のバディーの家で行われたBBQパーティーに全員が招かれ楽しみました。帰国時のチャンギ空港では、見送りにきたホストファミリーともども別れ難く、涙で手を振りながら出国ゲートを後にしました。

今後もこのような国際交流が根付き、両校はもとより、両国の友好関係がさらに確固たるものになることが望まれます。



一緒に授業を受ける筑波生徒(私服)

働く人になろう!

附属久里浜特別支援学校・小学部 教諭 柘植美文

本校では、全学年で「社会生活の指導」を行っています。年齢や学級集団の特性に応じて、校外に出掛けたり、公共交通機関を利用したり、お手伝いや働く活動を体験したりしています。自閉症のお子さんは、特に初めて行うことに関して、その行為の意味を丁寧に伝えることで、自分なりの見通しをもって生き生きと活動に取り組むことができます。幼稚部段階から社会性を身に付ける機会を設けることで、自信をもって取り組めることが増えると考えています。

今年度、5年生では、「働く人になろう!」を合い言葉に、マクドナルドでの職場体験や日産自動車工場の見学を計画しました。学習の中で、小さい頃はいっぱい遊んだことや小学生になると勉強が始まったこと、高校を卒業すると大人になることなど、子供たちが成長の過程について自分なりのイメージをもっていることが分かりました。知っている仕事について、電車の運転手、警察官、店員など、たくさんの職種を答えることもできました。

マクドナルドでの職場体験に向けては、手洗いの方法や挨拶の仕方、ハンバーガーの作り方を学習しました。手順カードを確認しながら、手洗いをしたり接客の言葉を言ったりするなど、一生懸命に練習していました。当日は、緊張した表情でしたが、練習の成果を発揮して、大きな声で「いらっしゃいませ!」とお母さんに自分が作ったハンバーガーを売ることができました。



日産自動車工場の見学に向けては、最初に、働くことと給料がもらえることを知ったり、給料の使い道について考えたりする学習を行いました。「ポテトを買いたい!」「車を買いたい!」など、使い道を想像するだけでも楽しかったようです。また、教室に小さな「久里浜工場」を作り、ライン作業の疑似体験をしました。ティッシュの空箱や豆腐のパック、ペットボトルの蓋を利用した自動車の製作でしたが、どの子も真剣に取り組みました。作業開始のチャイムが鳴ると、担当する工程に戻る様子はとても頼もしく見えました。学習の最後には、自分たちが作った自動車を検品し、丁寧に作ることや協力して作ることを改めて確認しました。

これらの学習に向かう真剣な表情や笑顔から、「働くって大変だけど楽しそう!」「将来、自分も働く人になりたい!」という気持ちの芽生えを感じています。店員や電車の運転手、宇宙飛行士への憧れなど、子供たちの夢は広がっています。来年度は、一般のお客さんとやりとりをするような職場体験に挑戦できたらと、教員の夢も膨らんでいます。日々の学習の一つ一つが、「将来働く人になるための自分づくり」であると考え、御家庭と協力して子供たちを育てていきたいと考えています。



車のペイント工程

パラリンピック競技支援シンポジウムを開催 —筑波大学理療科教員養成施設—

理療科教員養成施設長
宮本俊和

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催決定で障害者スポーツの興味・関心が高まる中、筑波大学理療科教員養成施設は、3月9日、社会貢献プロジェクトシンポジウム「パラリンピックにおける競技支援—視覚障害スポーツの競技支援の課題と鍼灸マッサージ—」を筑波大学東京キャンパスで開催し、約150名の参加者があった。

シンポジストには、2012年ロンドンパラリンピックなど6

ラソン出場で千葉盲学校教諭の岡村正広氏、パラリンピック選手育成・指導者として筑波大学附属視覚特別支援学校教諭の寺西真人氏を招いた。

出席者から、ブラインド選手のマルチサポート体制の構築や研究拠点作り、鍼灸マッサージ

活用による競技支援の必要性など、2020年東京に向けた世界トップのパラリンピックを開催するための貴重な発言があり、約2時間にわたり活発な討論が行われた。

発言する河井純一氏(中央)



大会連続パラリンピック出場で日本人最多のメダルを獲得した河合純一氏、北京パラリンピック柔道90kg級出場で日本パラリンピアンズ協会理事の初瀬勇輔氏、2012年ロンドンパラリンピックマ

平成25年度 筑波大学附属学校教育局主催 公開教員研修会等開催

附属学校教育局学校支援課

勇気と自信を いただいた発表会

附属聴覚特別支援学校 教諭 榎並裕子



研究発表会

2月22日、筑波大学附属学校教育局は、平成25年度附属学校教育局主催公開教員研修会及び附属学校研究発表会を、東京キャンパス文京校舎を会場に開催した。

この研修会は、教職員の幅広い知見を得るための一環として開催し、

校内教職員及び学外からの参加も含め131名の参加があった。

大阪大学大学院人間科学研究科小野田正利教授による「モンスターペアレント論を超えて～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性」と題し、学校現場での深刻な問題をとりあげて講演を行った。昼食休憩の後に、筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部生徒による映画「空を見上げて」の上映を行った。

研究発表会は、筑波大学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、広く参加者から意見を求めることを目的に開催した。石隈利紀附属学校教育局教育長の挨拶の後、「3拠点からグローバル人材を育てる－筑波大学附属学校からの発信－」を研究主題として、附属学校教育局が取り組んでいる先導的教育拠点・教師教育拠点・国際教育拠点という「3つの拠点構想」について、4課題の研究発表及び1講演を行った。今年度は、各附属学校の活動報告としてのポスターセッションも含め、「国際教育・グローバル人材育成」をテーマに掲げて実施した。附属学校教諭、本学教員をはじめ100名を超える参加があった。



ポスターセッション



筑波大学附属聴覚特別支援学校の校内には樹齢120年を超える大きな一本の樺の木があります。本校の文化祭は、この木に因み「樺祭（けやきさい）」という名で親しまれています。昨年度樺祭のテーマは「存在～shining～」でした。

高等部専攻科ビジネス情報科では、学習の一環として「ビデオ制作」を取り入れています。各自がビデオカメラを操作して撮影をしたものをビデオ編集ソフトに取り込み字幕を付けて編集します。字幕を付ける技術は聴覚障害の生徒たちには障害を客観視する意味でもいい勉強になっています。

最近の文化祭では、毎年2学年全員が力を合わせて映画を作り発表しています。昨年は「空を見上げて」というタイトルで発表し、優秀な作品に与えられる『鴻友会賞』を受賞しました。

文化祭のテーマが発表になると生徒はそれに合わせてストーリーを考えます。それまでにビデオの撮り方や編集ソフトにも慣れておかななくてはならないのですが、現実的な目標を目の前にしながらの学習は、生徒たちにとってはとても楽しく、想像も大きく膨らみます。2学期には台本を片手に撮影に入ります。ビデオの映像をパソコンに取り込み、みんなで顔を突き合わせて映像に見入ります。作品の完成に向けて生徒たちの気持ちが一つになっていく瞬間でもあります。その意気込みたるやプロも顔負けです。一通りの編集が完了した後も映像を見ながら、テーマに切り込む部分や笑わせる部分などを話し合っては何度も何度も調整し、仕上げていきます。

平成26年2月22日(土)、東京都文京区の筑波大学東京キャンパスにおいて、筑波大学附属学校教育局主催「公開教員研修会」が行われました。本研修会には、筑波大学附属11校の先生方をはじめ、多くの先生方が参加され、生徒が制作した映画をご覧いただきました。「生徒さん達が自分たちの力で、このような映画を制作したこと、また映画の内容の良さに驚きました。」「耳が聞こえにくいということで、コミュニケーションがとりにくいこ

とが、この映画を見て改めてわかりました。」等多くの感想をいただきました。

学校から社会に出る準備期間とでもいうべき専攻科の生徒たちにとって、たくさんの勇気と自信を頂戴できた発表会となりました。貴重な経験の場を与えてくださった方々に改めて感謝申し上げます。

平成26年度 附属学校研究 発表会日程表

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会を下記日程で開催する予定です。ぜひご参加ください。

区分	研究協議会等開催予定日	区分	研究協議会等開催予定日
附属学校教育局	附属学校研究発表会 平成27年2月28日(土)		関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」 平成26年6月12日(木)・13日(金)
附属小学校	研究発表会 平成26年6月13日(金)・14日(土) 初等教育研修会 平成27年2月12日(木)・13日(金)	附属聴覚特別支援学校	聴覚障害教育担当教員講習会(文部科学省・筑波大学共催) 平成26年11月19日(水)～21日(金) 聴覚障害早期教育公開研修会 平成27年2月(予定) 筑波大学連携研究報告会(系と附属聴覚特別支援学校) 平成27年3月(予定)
附属中学校	研究協議会 平成26年11月8日(土)	附属大塚特別支援学校	研究協議会 平成27年2月13日(金)
附属高等学校	教育研究大会 平成26年12月6日(土)	附属桐が丘特別支援学校	自立活動実践セミナー 平成26年8月4日(月)～6日(金) 実践研究協議会 平成27年2月5日(木)・6日(金)
附属駒場中学校	教育研究会 平成26年11月22日(土)	附属久里浜特別支援学校	実践研究協議会 平成27年2月6日(金)・7日(土)
附属駒場高等学校			
附属坂戸高等学校	総合学科研究大会 平成27年2月19日(木)・20日(金)		
附属視覚特別支援学校	研究協議会 平成27年2月21日(土)		

※各附属学校が会場となります。(附属学校研究発表会を除く)

